

ニホンウナギ

Anguilla japonica

ウナギ目
ウナギ科

小笠原諸島

DD

環境省

EN

【形態・生態】

全長 1m。体は白い腹面を除きオリーブ色から暗い灰色で、まだら模様はない。背鰭の起点が胸鰭後端と肛門間の中間よりも後ろに位置することで近似種と識別できる。河川や湖沼など淡水域から汽水域だけでなく、河口に隣接する沿岸域にも生息する。夜行性で、昼間は転石の下などに潜み、夜間、甲殻類など小動物を捕食する。降河回遊を行い、5月に西マリアナ海嶺で産卵、ふ化仔魚は冬季に日本沿岸に接岸する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；朝鮮半島からベトナム、台湾、フィリピン

【小笠原諸島における生息環境】

標本に基づく記録を確認できず、詳細は不明である。本種は、島しょでは河川下流域に隣接する淡水の湿地的環境に生息する傾向が強いが、現在の小笠原ではそうした環境が見られない。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・降河阻害につながる。河川から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

川那部浩哉ら（編・監修），2005；黒木真理・塚本勝巳，2011。

（執筆：瀬能宏）

オオウナギ

Anguilla marmorata

ウナギ目
ウナギ科

小笠原諸島

VU

環境省

【形態・生態】

全長 2m。体は白い腹面を除き黄褐色で、黒いまだら模様がある。背鰭の起点が胸鰭後端と肛門間の中間よりも前に位置することで近似種と識別できる。河川の淡水域に生息する。夜行性で、昼間は転石の下などに潜み、夜間、甲殻類など小動物を捕食する。降河回遊を行う。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州、九州、琉球列島；インド洋、太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

河川規模とは関係なく河川中・下流域の転石の下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・降河を阻害している。河川から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

川那部浩哉ら（編・監修），2005；中坊徹次（編），2013。

（執筆：瀬能宏）

オオイワシ

Thryssa baelama

ニシン目
カタクチイワシ科

小笠原諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 10.8cm。吻は突出し、下顎先端は吻端よりも後ろにある。腹部に稜鱗が発達し、臀鰭軟条数は 30～33。主上顎骨後端は前鰓蓋骨後縁を越えない。河川汽水域から河口に隣接する沿岸域に群れで生息する。動物プランクトンをろ過して食べられる。産卵に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島（絶滅）、琉球列島；サモア諸島、インド洋、西太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

マングローブが発達する大きな河川汽水域から隣接する沿岸域にかけて生息していたと考えられる。国立科学博物館に 1901 年に採集の標本が所蔵されているほか、1911 年に母島からの記録があるが、その後は記録が途絶え、絶滅したと推測される。

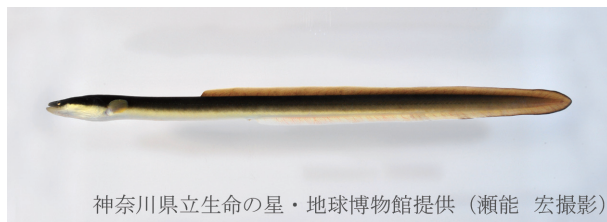
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修、渇水による河口閉塞とそれに伴う淡水化や底質環境の悪化によりマングローブが衰退し、生息環境が消失した。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Kishinouye, K., 1911; Whitehead, P. J. P. et al., 1989.

（執筆：瀬能宏）



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）



© 木村清志

チョウセンタレクチ

Thryssa hamiltonii

ニシン目
カタクチイワシ科

小笠原諸島

EX

環境省

【形態・生態】

体長 20cm。吻は突出し、下顎先端は吻端よりも後ろにある。腹部に稜鱗が発達し、臀鰭軟条数は 35～45。主上顎骨後端は前鰓蓋骨後端を越える。河川汽水域から河口に隣接する沿岸域に群れで生息する。動物プランクトンをろ過して食べると思われる。産卵に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、隠岐諸島；ペルシャ湾以東のインド洋、西太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

マングローブが発達する大きな河川の汽水域から隣接する沿岸域にかけて生息していたと考えられる。第2次世界大戦前に採集されたと思われる米国国立自然史博物館所蔵の1個体の標本以外に確実な記録を確認できず、絶滅したと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修、渇水による河口閉塞とそれに伴う淡水化や底質環境の悪化によりマングローブが衰退し、生息環境が消失した。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Whitehead, P. J. P. et al., 1989; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



© 木村清志

ウチウミマダラエソ

Saurida nebulosa

ヒメ目
エソ科

小笠原諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 19cm。各鰭に褐色斑があり、マダラエソに似るが、体が細長い。体側の斑紋は横帯状にならず、最下方では小さな斑点が直線状に並ぶ。胸鰭後端は腹鰭基底後端を越えない。河川汽水域や内湾の砂泥底に生息する。魚類や甲殻類を食べる。産卵に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州(和歌山)、四国(高知)、九州(鹿児島)、琉球列島；インド洋および太平洋の熱帯域

【小笠原諸島における生息環境】

大きな河川の河口や沿岸浅所の砂泥底に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞とそれに伴う淡水化や底質環境の悪化により生息環境が狭められている。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

鈴木寿之ら, 1995; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



© 木村清志

オガサワラクロサギ

Gerres baconensis

スズキ目
クロサギ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

体長 18cm。背鰭棘は糸状に伸長せず、棘条部の前部が黒い。口を前方へ突出させることができ、底質中の小動物を食べる。近縁種には、本州・四国・九州に分布するクロサギ、琉球列島に分布するミナミクロサギがある。

【分布の概要】

小笠原諸島；フィリピン

【小笠原諸島における生息環境】

河口付近の沿岸浅所の砂泥底に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞とそれに伴う淡水化や底質環境の悪化により生息環境が狭められている。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Iwatsuki, Y. et al., 1999; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



© 鈴木寿之

トゲナグユゴイ

Kuhlia munda

スズキ目
ユゴイ科

小笠原諸島

CR

環境省

EN

【形態・生態】

体長 21cm。体は一様に銀白色で黒点や網目模様がないことで近似種から識別できる。尾鰭は黄色く、後縁が黒い。幼魚は尾鰭上葉と下葉、基底付近に黒色斑がある。河川汽水域から淡水域にかけて生息し、成魚は比較的大きな河川汽水域の中層を群れて活発に遊泳する。昆虫など小動物を捕食すると思われる。降河回遊魚と思われるが、産卵に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、琉球列島；ニューギニアからフィジーとタヒチまでの中・西部太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

大きな河川の汽水域を中心に生息していたと思われる。1901 年と 1907 年以降の記録が途絶えていたが、2003 年に父島の河口域で幼魚が採集された。ただし、これは偶発的な分散であり、すでに絶滅している可能性もある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修による護岸工事で生息環境が狭められている。渇水による河口閉塞が遡上・降河阻害につながる。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Sato, M. et al., 2004; 川那部浩哉ら (編・監修), 2005.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

オオクチユゴイ

Kuhlia rupestris

スズキ目
ユゴイ科

小笠原諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 48cm。体の地色は銀色あるいは淡いオリーブ色で、体側に黒点や黒い網目模様がある。尾鰭の上葉と下葉に大きな黒色斑があることでユゴイから識別できる。河川の汽水域から淡水域にかけて生息し、昆虫類など小動物を捕食する。降河回遊魚で、産卵のために汽水域や沿岸域に移動する。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州 (神奈川)、四国 (高知)、琉球列島；インド洋、太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

大きな河川の汽水域から淡水域にかけて生息すると思われる。1894 年に記録されて以降、再度記録されることはなかったが、2012 年に父島の複数河川で写真により記録された。トゲナグユゴイの幼魚同様偶発的な分散によるもので、絶滅している可能性もある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修による護岸工事で生息環境が狭められている。渇水による河口閉塞が遡上・降河阻害につながる。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Randall, J. E. et al., 1997; 川那部浩哉ら (編・監修), 2005.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

テンジクカワアナゴ

Eleotris fusca

スズキ目
カワアナゴ科

小笠原諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 17cm。腹鰭が左右に分離する。体は焦げ茶色だが、背中だけ黄褐色になることも多い。チチブモドキに酷似するが、縦列鱗数がやや多く (本種 56 ~ 65、チチブモドキ 48 ~ 56)、鱗はより細かく見える。河川中流から上流にかけての淡水域に生息する。夜行性で、昼間は石の下などに潜み、夜間、小動物を捕食する。両側回遊魚で、ふ化仔魚は海へ降り、全長 2cm に成長すると河川へ遡上する。

【分布の概要】

小笠原諸島、静岡県以南の本州・四国・九州、琉球列島；インド洋、太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

比較的大きな河川の中流域に生息し、石の下や倒木の陰など見られる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏 (監修), 2004; 中坊徹次 (編), 2013.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

ホホベニサラサハゼ

Amblygobius sp.

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体長 4cm。体側に 2 本の赤い縦線がある。上方の縦線は頭部で濃い。鰓蓋では下方の縦線上に黒点が 1 つある。未記載種を含む近似種が 2 種知られており、頬の斑紋の相違により識別される。河口域や沿岸浅所の砂泥底に巣穴を掘って生息し、入口付近で海底から数 cm 離れて単独もしくはペアでホバリングしている。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州（和歌山）、琉球列島；パナペ、西太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

大きな河川の汽水域と沿岸浅所の砂泥底に生息する。1999 年に父島の河川汽水域、2005 年に同じく父島の沿岸浅所での目視記録はあるが、標本に基づく確認が必要である。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞とそれに伴う淡水化や底質環境の悪化により生息環境が狭められている。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏（監修），2004；中坊徹次（編），2013。

（執筆者：瀬能宏）



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
（瀬能 宏撮影）

クチサケハゼ

Oligolepis stomias

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体長 4cm。眼の下に L 字もしくはくの字形の黒色斑を持つことが特徴。ノボリハゼに似るが、本種の口は大きく、後端が眼の後縁下を越える。河川の汽水域から淡水域にかけて生息するが、感潮域上端付近に多い。泥底に巣穴を掘り単独で生息する。産卵に関する生態は不明だが、両側回遊魚と考えられる。

【分布の概要】

小笠原諸島、四国（高知）、九州（鹿児島）、琉球列島；フィリピン、パプアニューギニア、サモア

【小笠原諸島における生息環境】

1992 年（神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵標本）と 1999 年（目視）に父島の河川で生息が確認されているが、感潮域上端付近の環境変化が著しく、すでに絶滅している可能性もある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修による環境変化により感潮域上端付近の環境が破壊されている。ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏（監修），2004；中坊徹次（編），2013。

（執筆者：瀬能宏）



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
（瀬能 宏撮影）

ミナミサルハゼ

Oxyurichthys visayanus

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体長 8cm。サルハゼ属は頭部背中線上に低い皮質隆起があることが特徴で、本種は眼に皮質突起がないことや、体側に幅の狭い横帯が多数あることが特徴だが、多数の近似種が知られるため識別は難しい。河川汽水域の軟泥底に生息する。産卵に関する生態は不明だが、両側回遊魚と考えられる。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州（静岡、三重、和歌山）、琉球列島；ベトナム、フィリピン、インドネシア

【小笠原諸島における生息環境】

マングローブが発達する大きな河川の汽水域の軟泥底に生息する。父島では 1999 年、2002 年、2003 年に記録されたが、2010 年の調査では幼魚 1 個体が採集されたのみで、成魚は確認されなかった。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。また、河口閉塞に伴う淡水化や底質環境の悪化により生息環境はほとんど失われている。河川汽水域から沿岸域までの連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏（監修），2004；中坊徹次（編），2013。

（執筆者：瀬能宏）



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
（瀬能 宏撮影）

オガサワラヨシノボリ ※備考 (p. 375)

Rhinogobius ogasawaraensis

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島 **EN**

環境省 **EN**

【形態・生態】

体長 7.3cm。多数の近似種が知られているが、小笠原諸島に分布するヨシノボリ属は本種のみ。雌は体側中央に1本の破線状縦線があり、尾鰭基底の斑紋はY字形。雄は頬や体側に赤い小斑点が目立つ。河川中流域から上流域の礫底や岩の上に生息し、水生昆虫など小動物を捕食する。両側回遊性で、産卵期は1～5月(盛期は3～4月)。ふ化仔魚は降海した後、4月ごろから遡上を開始し、6～7月にピークを迎える。ダム湖の個体群は陸封され、ダムを海の代わりに利用する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

河川規模にあまり左右されず、中流域から上流域にかけての礫底や岩の上、ダム湖内の泥底、ダム湖に流入する河川に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。ダムによる陸封化とダム湖内に繁殖しているグッピーなど外来魚との競争が懸念される。また、ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

横井謙一, 2009; Suzuki, T. et al., 2011.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

ボウズハゼ

Sicyopterus japonicus

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島 **VU**

環境省

【形態・生態】

体長 15cm。尾鰭の上下に黒色縦線がないこと、体側前半の横帯は前に、後半の横帯は後ろに傾くことが特徴。河川中流域や渓流域に生息する。流れの速い場所を好み、岩盤や転石上で付着藻類を削り取って食べる。両側回遊魚で、和歌山県での産卵期は7～9月(水温 20～26℃)で年1回産卵する。ふ化仔魚は280日前後の海洋生活を送った後、再び河川へ遡上する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、福島・兵庫以南の本州、四国、九州、琉球列島; 台湾

【小笠原諸島における生息環境】

比較的大きな河川の中流域から上流域にかけての転石や岩盤上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏(監修), 2004; 松浦啓一(編著), 2012.

(執筆: 瀬能宏)



ルリボウズハゼ

Sicyopterus lagocephalus

スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島 **CR**

環境省 **VU**

【形態・生態】

体長 10cm。尾鰭の上下に黒色縦線があることが特徴。雄は体が瑠璃色で、尾鰭は鮮やかな橙色。河川中流域や渓流域に生息し、ボウズハゼよりも流れの速い場所を好み、淵尻や淵頭の岩盤や転石上で付着藻類を削り取って食べる。両側回遊魚で、ふ化仔魚は130日間程度の海洋生活を送る。

【分布の概要】

小笠原諸島、琉球列島; インド洋、太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

比較的大きな河川の中流域から上流域にかけての転石や岩盤上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏(監修), 2004; 松浦啓一(編著), 2012.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

タネカワハゼ

Stenogobius sp.スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 8cm。眼の下に斜め下方へ向かう涙状の目立つ黒色帯があることが特徴。雄の背鰭は濃い赤で縁取られる。標本では体側に細い横線が多数あるが、生時は体全体が淡い黄褐色で横線は目立たない。河川中・下流域の淡水域に生息し、淵など流れの緩やかな砂地に群がりで見られ、砂中の小動物などを食べる。危険が迫ると素早く泳ぎ去るか、砂中に潜る。両側回遊性だが、産卵に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、九州（宮崎・鹿児島）、琉球列島；台湾

【小笠原諸島における生息環境】

比較的大きな河川の下流域や河口の砂底に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏（監修），2004；中坊徹次（編），2013。



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆：瀬能宏)

ナンヨウボウズハゼ

*Stiphodon percnopterygionus*スズキ目
ハゼ科

小笠原諸島

CR

環境省

【形態・生態】

体長 4cm。雄は頭部や体背部が青緑色で、第 1 背鰭の中央棘が伸長し、全体的にとがることが特徴。雌は体の地色が黄褐色で、頭部から尾鰭基底にかけて 2 本の明瞭な黒色縦線があるが、近似種の雌との識別は難しい。河川中流域や渓流域に生息し、流れの緩やかな場所を好み、淵や平瀬の転石上で付着藻類を削り取って食べる。両側回遊魚で、繁殖期には雄 1 個体と雌数個体が群がりをつくる。

【分布の概要】

小笠原諸島、静岡以南の本州、四国、九州、琉球列島；台湾、グアム、パラオ

【小笠原諸島における生息環境】

比較的大きな河川の中流域から上流域にかけての転石や岩盤上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ノヤギのし尿による水質悪化の影響が懸念される。渇水による河口閉塞が遡上・流下を阻害している。河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏（監修），2004；中坊徹次（編），2013。



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆：瀬能宏)

シロワニ

*Carcharias taurus*ネズミザメ目
オオワニザメ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

全長 3.18m。両背鰭、腹鰭、臀鰭、尾鰭下葉がほぼ同大であること、体側に黒い染み状の斑紋が散在すること、歯は細長くナイフ状で、両側に側尖頭を持つことなどが特徴。岩礁やサンゴ礁、湾などの沿岸浅所に幅広く生息し、水深 191m まで出現する。ときに大群をつくることがある。昼間は岩穴でゆっくり泳いでいるが、夜間は活発に行動し、様々な魚類や甲殻類、軟体動物を捕食する。雄は全長 1.9 ~ 1.95m、雌は 2.2 ~ 2.3m で成熟する。胎生で、子宮内で無精卵や仔魚を食べ、最終的に 2 個体の仔魚が産出される。

【分布の概要】

小笠原諸島、相模湾以南の本州、四国、九州、琉球列島；東部太平洋を除く全世界の暖海（熱帯には少ない）

【小笠原諸島における生息環境】

沿岸の複数地点の岩礁で継続的に確認されており、港内に回遊して居ることもあることから沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 2001; Last, P. R. & J. D. Stevens, 2009。



(執筆：瀬能宏)

ドタヅカ

Carcharhinus obscurus

メジロザメ目
メジロザメ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

全長 4.2m。背中線隆起があること、各鰭に特徴的な斑紋や縁取りがないこと、第1背鰭は低く、起点は胸鰭内角の上にあること、上顎前方の歯の基部は幅広いことが特徴だが、近似種のガラパゴスザメとの識別は難しい。沿岸から沖合にかけて生息し、強い回遊性を示す。幼魚は浅い場所にいるが、成魚は水深200～400mで多く見られる。主に魚類を捕食する。胎生で、沿岸浅所で出産する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、房総半島以南の本州、九州、琉球列島；全世界の暖海

【小笠原諸島における生息環境】

1977年に目録的に報告されたのみで、標本に基づく記録はないが、沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Voigt, M. & D. Weber., 2011.

(執筆: 瀬能宏)



© 木村清志

メジロザメ

Carcharhinus plumbeus

メジロザメ目
メジロザメ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

全長 3m。背中線隆起があること、各鰭に特徴的な斑紋や縁取りがないこと、第1背鰭は高く、起点は胸鰭基底上にあることで識別される。沿岸から沖合にかけて生息する。普通は水深20～65mに見られるが、水深280mまでの海底付近を泳ぐこともある。主に底生魚類を捕食する。胎生。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海

【小笠原諸島における生息環境】

1997年に標本に基づき記録された。沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Voigt, M. & D. Weber., 2011.

(執筆: 瀬能宏)



© (一財) 沖縄美ら島財団

アカシュモクザメ

Sphyrna lewini

メジロザメ目
シュモクザメ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

全長 4.2m。シュモクザメ科は金槌のような頭部が特徴。頭部前縁は円みを帯び、中央に凹みがあることで近似種から識別できる。遊泳性で、沿岸あるいはやや沖合の表層に生息するが、少なくとも水深275mまで出現する。幼魚は岸近くにいる。大きな群れをつくり、魚類のほか、様々な無脊椎動物を捕食する。胎生で、雄は全長1.4～1.6m、雌は2.0～2.2mで成熟し、湾内に移動して出産する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、新潟・青森以南の本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海

【小笠原諸島における生息環境】

1977年に全長50cm程度の幼魚が父島で記録されている。出現は稀とされているが、沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Last, P. R. & J. D. Stevens, 2009.

(執筆: 瀬能宏)



© 鈴木寿之

シロシュモクザメ

Sphyrna zygaena

メジロザメ目
シュモクザメ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 4m。シュモクザメ科は金槌のような頭部が特徴。頭部前縁は円みを帯び、吻の前縁に凹みがないことで近似種から識別できる。遊泳性で、沿岸からやや沖合の水深 20m までの表層に生息する。幼魚は大きな群れをつくる。魚類の他、甲殻類や頭足類などを捕食する。胎生で、雄は全長 2.5m、雌は 2.65m で成熟する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海（熱帯域には少ない）

【小笠原諸島における生息環境】

1977 年に目録的に報告されたのみで、標本に基づく記録はないが、沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Last, P. R. & J. D. Stevens., 2009.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）

（執筆者：瀬能宏）

マダラエイ

Taeniura meyeni

エイ目
アカエイ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

体盤幅 1.8m。体盤は円形に近く、背面に黒や焦げ茶色のまだら模様があること、尾部の腹中線上に皮褶があり、後端は尾端に達することが特徴。沿岸の岩礁やサンゴ礁に生息する底生魚で、固い底質を好む。魚類を食べていたとの報告があるが、甲殻類や軟体動物など底生動物を幅広く食べると考えられる。胎生で、雄は体盤幅が 1～1.1m で成熟する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州（静岡、和歌山）、四国、九州、琉球列島；ミクロネシア、インド洋、西太平洋、ガラパゴス

【小笠原諸島における生息環境】

沿岸の複数地点の岩礁で確認されており、沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本来個体数が少ない種と考えられる。漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Randall, J. E., 2005; Last, P. R. & J. D. Stevens., 2009.



（執筆者：瀬能宏）

オニイトマキエイ

Manta birostris

エイ目
トビエイ科

小笠原諸島 *

環境省

【形態・生態】

体盤幅 7m。オニイトマキエイ属は頭鰭が可動性で先端が円いことによりイトマキエイ属から区別できる。本種はナンヨウマンタに似るが、口の周囲が黒く、頭部背面の白色斑の前縁が頭部前縁に平行である。遊泳性で、沿岸の表層に出現するが、ナンヨウマンタに比較して外洋性、回遊性が強い。小笠原では 7 月に体盤幅約 5m の雌と約 4m の雄との間で繁殖行動が観察されている。動物プランクトンをろ過して食べる。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州（陸奥湾、相模湾、駿河湾、和歌山）、四国（高知）、琉球列島（沖縄島、与那国島）；全世界の暖海

【小笠原諸島における生息環境】

父島列島の沿岸複数箇所記録されており、各島の周辺に生息すると考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島の個体群は孤立している可能性が示唆されている。世界遺産で注目される小笠原諸島は、将来的な来島者増加と関連して船舶航行頻度が増加し、本種との衝突事故の発生が懸念される。

【関連文献】

柏木努ら, 2010; 佐藤圭一ら, 2010.



（執筆者：瀬能宏）

ウシバナトビエイ

Rhinoptera javanica

エイ目
トビエイ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体盤幅 1.5m。体はほぼ菱形で、尾部は短い。背面は一様に茶色。頭部前縁中央が凹むことが特徴。遊泳性で、サンゴ礁や湾など沿岸浅所の様々な環境に生息し、大きな群れをつくることもある。貝類や甲殻類など底生無脊椎動物を食べる。胎生。

【分布の概要】

小笠原諸島、琉球列島；インド洋、西太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

1977年に標本に基づく記録がある他、1997年に観察記録が報告された。ダイバーによる撮影記録もあるので、沿岸に広く生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、個体数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

座間彰・藤田清, 1977; Last, P. R. & J. D. Stevens., 2009.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

サラサハタ

Chromileptes altivelis

スズキ目
ハタ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体長 47cm。頭部背縁が凹むこと、鰭や体の地色が白あるいはにぶい黄色で、全体に茶色や黒の水玉模様があることが特徴。沿岸浅所の岩礁やサンゴ礁に生息するが、内湾的な環境を好む。魚類や甲殻類などを捕食する。繁殖に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州(相模湾、駿河湾、和歌山、山口)、四国(高知)、琉球列島；東インド洋、西太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

1970年代に文献記録があるだけで、近年の確実な生息情報がない。沿岸浅所のサンゴ礁域でも比較的内湾的な環境に生息していると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本来個体数が少ない種と考えられる。成魚は市場価値が高く、遊漁の対象としても常に高い漁獲圧や釣獲圧にさらされていると思われる。幼魚は観賞魚としての市場価値が高く、飼育を目的とした乱獲が懸念される。

【関連文献】

Randall, J. E. & P. C. Heemstra., 1991; Heemstra, P. C. & J. E. Randall., 1993.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

タマカイ

Epinephelus lanceolatus

スズキ目
ハタ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

体長 1.77m。地色は黒っぽく、体に白い小さなまだら模様があること、各鰭に黄色と黒の虫食い状の斑紋があることが特徴。幼魚は体に黒と黄色の帯や斑紋が入り混じる。沿岸浅所の岩礁やサンゴ礁に生息し、濁りのある水域にも出現する。魚類や甲殻類などを捕食する。小型のサメ・エイ類、ウミガメの捕食例もある。繁殖に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州(和歌山、山口、鹿児島)；インド洋、太平洋

【小笠原諸島における生息環境】

確実な生息情報は母島で釣獲された全長 1.98m の個体の写真記録があるのみ。沿岸の岩礁域やサンゴ礁に生息すると考えられるが、近年の出現情報はなく、絶滅した可能性もある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本来個体数が少ない種と考えられる。成魚は市場価値が高く、遊漁の対象としても常に高い漁獲圧や釣獲圧にさらされていると思われる。幼魚は観賞魚としての市場価値が高く、飼育を目的とした乱獲も懸念される。

【関連文献】

Randall, J. E. & P. C. Heemstra., 1991; Heemstra, P. C. & J. E. Randall., 1993.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

ユウゼン

Chaetodon daedalma

スズキ目

チョウチョウウオ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

体長 15cm。鰭や体の地色は黒く、各鱗の中央あるいは前縁が白いため、黒い網目模様になる。体側中央に 1 白色横帯、背鰭・臀鰭の軟条部と尾鰭に黄色い縁取りがある。沿岸浅所のサンゴ礁や岩礁に生息し、大きな群れをつくる。小動物や藻類を食べる。繁殖に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州（相模湾、紀伊半島）、四国（高知）、沖縄諸島、南大東島

【小笠原諸島における生息環境】

沿岸浅所の岩礁やサンゴ礁に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

分布域の中心は小笠原諸島、伊豆諸島であり、同地域の準固有種的な存在でもある。観賞魚としての市場価値が高く、飼育を目的とした乱獲が懸念される。

【関連文献】

Kuiter, R. H., 2002; 岡村収・尼岡邦夫（編・監修）, 2005.



© 小林修一

(執筆: 瀬能宏)

ミズタマヤッコ

Genicanthus takeuchii

スズキ目

キンチャクダイ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

雄の体長は 25cm、雌では 22cm。雄は体側上半に 6～8 本の黒色縦帯があり、背鰭と尾鰭には眼径大の黒い水玉模様がある。雌は体側上半にさざ波様の黒色横線あるいは斑点がある。サンゴ礁の水深 20～45m に生息する。雄 1 個体と少数の雌からなる群がりて生息することから、雌性先熟型の性転換を行い、ハレムをつくると考えられる。動物プランクトンや付着藻類を食べると考えられる。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

サンゴ礁の水深 20～25m に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島の固有種である。同地域には広く分布すると思われるが、生息確認地点は極めて少ない。ダイバーにより定期的に観察されており、現在のところ減少傾向は指摘されていないが、飼育を目的とした乱獲が懸念される。

【関連文献】

Debelius, H. et al., 2003; 中坊徹次（編）, 2013.



© 小林修一

(執筆: 瀬能宏)

オビシメ

Scarus obishime

スズキ目

ブダイ科

小笠原諸島

*

環境省

【形態・生態】

雄の体長は 61cm、雌では 26cm。雄は頭部背面が丸く突出し、体や鰭は濃紺で、体側中央に幅広い黄色の横帯が 1 本あることが特徴。雌は体や鰭が黄色で、体側後半中央に水色の縦帯が 1 本ある。サンゴ礁の浅所に生息し、付着藻類を削り取って食べる。雌性先熟型の性転換を行うと思われるが、繁殖に関する生態は不明である。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島（偶発的な分散によると考えられる）

【小笠原諸島における生息環境】

沿岸浅所の岩礁やサンゴ礁に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

小笠原諸島の固有種であり、個体数は少ない。雄の個体数は特に少ないため、過度な漁獲圧がかからないようにする必要がある。

【関連文献】

岡村収・尼岡邦夫（編・監修）, 2005; 中坊徹次（編）, 2013.



© 小林修一

(執筆: 瀬能宏)

【種名・学名などの準拠文献】

目と科の配列、種の学名、標準和名は次の文献に従い、科内の種名の配列は学名のアルファベット順とした。

中坊徹次 (編), 2013. 日本産魚類検索 : 全種の同定 . 第三版 . 東海大学出版会 . 1748 pp.

【備 考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
オガサワラヨシノボリ	現地調査において、水質汚濁・汚染の進んだ河川においても比較的普通に観察され、グッピーやカダヤシといった国外外来種が多く生息する場所においても本種の生息数は決して少なくない。また、ダム湖において陸封され、継続的にまとまった個体群が維持されている現状が確認されたため、環境省 (第 3 次) ランクに対して 1 ランク下げた評価とした。なお、環境省第 4 次レッドリストでは同じランクになった。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
オガサワラクロサギ	本種は国内では小笠原諸島だけから知られている。幼魚期に個体群の一部が河川汽水域を育成場として利用しているが、分布がきわめて限定的であること、生息が予想される河川的环境は明らかに悪化していることから、海域での動向も含めて留意が必要である。
シロワニ	これらの種は IUCN のレッドリストで VU 以上 (アカシュモクザメは EN、その他は VU) に指定されており、継続的な捕獲圧が懸念されるため、留意が必要である。
ドタブカ	
メジロザメ	
アカシュモクザメ	
シロシュモクザメ	
マダラエイ	
ウシバナトビエイ	
オニイトマキエイ	本種は、小笠原諸島で恒常的に観察されている。IUCN のレッドリストのカテゴリは NT であるが、小笠原諸島の個体群は孤立している可能性が示唆されていること、世界遺産で注目される同地は、将来的な来島者増加と関連して船舶航行頻度が増加し、本種との衝突事故の発生も懸念されることから留意種とした。
サラサハタ	IUCN のレッドリストでは VU に指定されており、継続的な捕獲圧が懸念されるため、留意が必要である。
ユウゼン	本種の分布域の中心は伊豆・小笠原諸島であり、この地域以外で維持されている個体群は南大東島の小規模なものがあるだけの、伊豆・小笠原諸島の固有種的な存在である。また、鑑賞魚として人気があり、観賞用の乱獲が懸念されるため留意が必要である。
ミズタマヤッコ	小笠原諸島の海水魚では稀有な固有種のひとつで学術的価値が高い。同地域には広く分布すると思われるが、生息確認地点はきわめて少なく、少数個体からなるハレム * を形成すると考えられるため、個体数も少ない。観賞用の乱獲が強く懸念されることから留意が必要である。 * 一匹の雄と多数の雌とからなる、ある程度持続性のある集団。
オビシメ	小笠原諸島の海水魚では稀有な固有種のひとつで学術的な価値が高いが、継続的な捕獲圧を受けていることから留意が必要である。

【関連文献】

- Compagno, L. J. V., 1984. FAO species catalogue. Vol. 4. Sharks of the world. Part 2-Carcharhiniformes. FAO. x + 251-655 pp.
- Compagno, L. J. V., 2001. Sharks of the world: An annotated and illustrated catalogue of shark species known to date. Vol. 2. FAO. viii + 269 pp.
- Debelius, H., H. Tanaka & R. H. Kuiter, 2003. Angelfishes: A comprehensive guide to Pomacanthidae. TMC Publishing. 208 pp.
- Heemstra, P. C. & J. E. Randall, 1993. FAO species catalogue. Vol. 16. Groupers of the world. FAO. viii + 382 pp., 31 pls.
- Iwatsuki, Y., S. Kimura & T. Yoshino, 1999. Redescription of *Gerres baconensis* (Evermann & Seale, 1907), *G. equulus* Temminck & Schlegel, 1844 and *G. oyena* (Forsskal, 1775), included in the "*G. oyena* complex", with notes on other related species (Perciformes: Gerreidae). *Ichthyological Research*, 46(4): 377-395.
- 柏木努・伊藤隆・佐藤文彦, 2010. 撮影記録に基づく日本産リーフオニイトマキエイ *Manta alfredi* とオニイトマキエイ *M. birostris* の出現状況. 板鰐類研究会報, (46): 20-27.
- 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海 (編・監修), 2005. 山溪カラー名鑑: 改訂版日本の淡水魚. 山と溪谷社. 719 pp.
- Kishinouye, K., 1911. Description of the clupeoid fishes from Ogasawara or Bonin Islands. *Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo*, 2(7): 383-386, pl. 20.
- Kuiter, R. H., 2002. Butterflyfishes, bannerfishes and their relatives. TMC Publishing. 208 pp.
- 黒木真理・塚本勝巳, 2011. 旅するウナギ: 1億年の時空をこえて. 東海大学出版会. 282 pp.
- Last, P. R. & J. D. Stevens, 2009. Sharks and rays of Australia. Second edition. CSIRO Publishing. ix + 644 pp.
- 松浦啓一 (編著), 2012. 黒潮の魚たち. 東海大学出版会. 221 pp.
- 中坊徹次 (編), 2013. 日本産魚類検索: 全種の同定. 第三版. 東海大学出版会. 1748 pp.
- 岡村収・尼岡邦夫 (編・監修), 2005. 山溪カラー名鑑: 日本の海水魚. 第3版. 山と溪谷社. 783 pp.
- Randall, J. E., 2005. Reef and shore fishes of the South Pacific. University of Hawai'i Press. xii + 707 pp.
- Randall, J. E. & P. C. Heemstra, 1991. Revision of Indo-Pacific groupers (Perciformes: Serranidae: Epinephelinae), with descriptions of five new species. *Indo-Pacific Fishes*, (29): 1-332, pls. 1-41.
- Randall, J. E., H. Ida, K. Kato, R. L. Pyle & J. L. Earle, 1997. Annotated checklist of the inshore fishes of the Ogasawara Islands. *National Science Museum Monographs*, (11): 1-74, pls. 1-19.
- 佐藤圭一・内田詮三・西田清徳・戸田実・小畑洋・松本葉介・北谷佳万・三浦晴彦, 2010. 南日本におけるオニイトマキエイ属 (Genus *Manta*) 2種の記録と分類, 同定および標準和名の提唱. 板鰐類研究会報, (46): 11-19.
- Sato, M., H. Sakai & M. Nakamura, 2004. *Kuhlia boninensis* (Fowler, 1907), a junior synonym of *Kuhlia munda* (De Vis, 1884) (Perciformes: Kuhlidae). *Ichthyological Research*, 51(1): 70-72.
- 瀬能宏 (監修), 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社. 534 pp.
- Suzuki, T., I.-S. Chen & H. Senou, 2011. A new species of *Rhinogobius* Gill, 1859 (Teleostei: Gobiidae) from the Bonin Islands, Japan. *Journal of Marine Science and Technology*, 19(6): 693-701.
- 鈴木寿之・瀬能宏・花崎勝司, 1995. 日本における分布が確認されたウチウミマダラエソ (新称) について. *I. O. P. Diving News*, 6(9): 2-3.
- Voigt, M. & D. Weber, 2011. Field guide for sharks of the genus *Carcharhinus*. Verlag Dr. Friedrich Pfeil, München, 151 pp.
- Whitehead, P. J. P., G. J. Nelson & T. Wongratana, 1989. FAO species catalogue. Vol. 7. Clupeoid fishes of the world. Part 2-Engraulidae. FAO. viii + 305-579 pp.
- 横井謙一, 2009. 絶滅危惧種オガサワラヨシノボリの保護に関する研究. 近畿大学農学部紀要, (42): 145-201.
- 座間彰・藤田清, 1977. 小笠原諸島産魚類目録. *Journal of Tokyo University of Fisheries*, 63(2): 87-138, pls. 5-9.